

薔薇の入った手紙



音沙汰 繚

貴方は以前私に「どんな人が好き？」と訪ねた事がありました。覚えているでしょうか。

初めてあったとき、2人は花屋の薔薇の前でした。仲良くなり、数ヶ月たち、私は感じました。貴方が”運命の人”だと。それは、”好き”とはまた、違った感覚でした。”好き”以上の何か特別な気持ち。それまでの私には初めての気持ちでした。それから私は貴方に気持ちを伝えようと、自分なりに努力しました。花が好きあなたと話したいと願うと、必死で勉強して、貴方の誕生日に何か贈ろうと考えると、貴方の趣味や好みを聞き出して、たくさんバイトもしました。しかし、どちらも失敗。花言葉はたくさん覚える事が出来たのに、勇気が出ず、誕生日にも渡し損ねてしまいました。

「どんな人が好き？」貴方に聞かれた時はとっても驚きました。普段交わす会話では、恋愛の話には全くと言っていい程なりません。突然の事で驚いたのです。しかも、相手は貴方ですから。聞かれたあとの空白の五秒間、私の頭の中は今までにないくらいにフル稼働していました。しかし、貴方の言葉が頭の中でこだまするばかりで、答えは見つかりませんでした。結果、”聞こえないふり”をして貴方を無視してしまった事を、今でも申し訳なく思っています。

それから数日立っても、私の頭の中は貴方の言葉が残るばかり。いくら考えてもわからないのです。貴方は無視した事を全く気にしていないそぶりで、私に、今まで通り、話しかけてくれました。2人で話す何よりも大切な時間。ふと、貴方の目を見ると、瞳には、私だけが映っていました。その瞬間、私は貴方に対する”答え”がわかったのです。

付き合い始めた頃のささいなけんかも、今ではいい思い出です。意地っ張りな2人は、丸々三日間、一言も口をききませんでしたね。そして、とうとう4日目。貴方は私のうちを尋ねてきました。赤い薔薇を一本もって。単純な私はすぐに機嫌が直りました。今考えてみると、私のことをよくわかっていたのですね。記念日とかをすぐに忘れてしまう貴方が、2人の出会いを覚えて下さっていたのには、とても感激しました。あのときの三日間、貴方は私の事を想っていたのでしょうか。

手紙

月日が経ち、私たちは夫婦になりました。プロポーズから3年後には可愛らしい男の子も授かりましたね。今ではその子も独り立ちして、もう立派な社会人です。彼に妻はいませんが、今度、「紹介したい人を連れてくる。」そうです。新しい服を買っておこうかしら。

貴方がなくなった日のことを、ふいに思い出す日が増えました。お医者様に、息子に、そして私に看取られて、貴方は亡くなりました。私は、涙こそ流さなかったけれど、とてもショックで生きる希望もなくしてしまいました。貴方が残してくれた思い出と、たくさんの手紙さえなければ。それらがあったからこそ、今もこうして生き、こうして10年ごしに思いを綴っているのです。何処へ郵送すれば貴方へ届くかなんてわからないのに。

貴方の死を覆すことは出来ません。でも、貴方の優しい目が、えくぼの浮かぶ頬が、ゴツゴツと大きい手が無くなったとしても、私の記憶の中で、貴方は生き続けるのです。私が貴方を想う限り、永遠に。

こうして2人、一緒にいる。

貴方と私。

私の好みは貴方です。

追伸

最近、昔のことをよく思い出します。私ももうすぐお迎えが来るのでしょうか。そのときはまた、2人でお花屋さんを開きましょうね。

この手紙が見つかったのは、四月の花が咲き誇るような清々しい朝のことでした。それは、おばあさんがお医者様に、息子さんに看取られながら亡くなった、4日後のことでした。この手紙は封筒に入っており、封さえされていないもので、切手も、宛名もしっかりありました。

「私の愛する貴方へ。」

切手には一輪の薔薇が描かれているのでした。